

## 博士論文

### 要約

# Literary translators as peritextual authors: Conventions, agency, and image building in the writing of Japanese translator commentary

Isabelle BILODEAU

本論文は、日本の文芸翻訳者が執筆する「訳者あとがき」を対象にして、翻訳者が自己提示などのためにその文章をどのように利用しているのかを考察するものである。翻訳者が執筆するパラテキストの役割の一つは、読者と作品との距離を縮めるものと一般的に認められており、それは翻訳を受け入れやすくするための効果的な方法であると考えられる。それにもかかわらず、欧米における翻訳出版物（特に大衆文学作品）は、まれにしか後書きや前書きを含んでいない。この事実から、多くの欧米出版社は訳者後書きというパラテキストが不必要、もしくは作品の宣伝に有害であると判断していることが分かる。

しかしながら、日本において「訳者あとがき」の執筆は慣例になっており、あらゆる文学ジャンルに見られる。翻訳者の「可視性」と翻訳作品のパラテキストに関する欧米出版社の考えとは正反対のこの慣例は、日本の翻訳者に、一人称での発言を可能にする場を提供しているのである。

本論文は、日本における「翻訳者による書籍内解説」(translator commentary, 以下“TC”と表記する)、いわゆる「訳者あとがき」の慣例を確認し、その機能を考察することに主眼を置いている。具体的には、まず日本の翻訳出版の場における TC の使用範囲、TC の外面的・内容的特徴、及び TC が文学の場において果たしている機能を確認し、そして、このような TC の慣例や機能を通して翻訳者は実際にどのように一人称的立場を利用しながら著作者としての行為性 (agency) を示しているかを考察する。

本論文は三部構成となっている。第一部（第一章－第三章）は、考察の理論的枠組みを説明し、歴史的背景を確認する。第二部（第四章－第七章）は、まず本論で調査対象とする TC を決定し、対象サンプルに対し量的・質的側面から分析を行う。そして第三部（第八章－第十章）は、パラテキスト執筆者としての翻訳

者に注目し、TCに見られる彼らの行為性の実例を分析する。以下、各章の概要を示す。

第一章では、研究対象となる TC の定義を確認し、以下の三つの問題を提起する。

1. 欧米とは異なる出版習慣である日本の TC は、どのように構成されているか。
2. 翻訳者は TC の執筆を通して、どの程度、またどのように慣例の枠を超える個人的な行為性を示すか。
3. TC という出版習慣は、日本の文芸翻訳者の行為性においてどのような機能を持つか。また、その機能はどのように利用されているか。

第二章では、本研究を構成する主概念（行為性、不可視性、自己イメージ）を翻訳学の観点から確認する。それに加え、ジェラルド・ジュネットの「ペリテキスト」（書籍内パラテキスト）の機能とピエール・ブルデューの「象徴財市場」（market of symbolic goods）が本研究にどのように適用できるかを検討する。また、欧米における既存の TC 研究が、翻訳規範や歴史的情報を提示する資料として TC の価値を認めながらも、個人表現の場としての TC に関してはほとんど無視してきたことを指摘する。

第三章では、日本と欧米の TC に関する歴史的背景を確認する。まず、過去（江戸・明治・大正・昭和時代）に書かれた TC を考察しながら、日本における現在の「訳者あとがき」の起源を説明する。特に、現代の出版業界、及びそこで慣行となっている「解説」は、その萌芽が江戸時代に認められることを明らかにする。明治時代から盛んになる翻訳出版は、「解説」の伝統を TC の形で継承したと考えられる。一方、欧米の翻訳出版物においても「解説」の伝統は存在するが、それは必ずしも翻訳者が執筆するものではない。欧米出版業界は翻訳者の存在を無視する傾向があり、近年では文芸翻訳者の組織が、翻訳者の「可視性」を求める運動を行うようになった。彼らはその要求を実現する手段の一つとして、出版社に対して TC の一般化を求めているのである。このような運動は日本では行われていない。日本において翻訳行為は、ブルデューの言う「象徴的な価値」がある程度認められた「文化的な生産」と見なされているからだと考えられるのである。

第四章から、本論文の本体となる調査検討に入る。現代日本における翻訳出版物の調査サンプルを得るために用いた層化抽出による収集方法を明示し、その方法から得られたサンプルを示す。今回の調査では、*Index Translationum* のデータベースにおける「文学」カテゴリーに限定し、この分野で 1992 年から 2007 年（計 16 年間）にかけて日本で出版された 64 冊の翻訳作品（起点言語の特定はしない）を抽出した。

第五章では、サンプルにおける TC の有無を確認し、作品の文学ジャンル及び文学的地位と、TC の有無との相関関係を明らかにする。所属シリーズと書籍形体のためほとんど TC が付されていないなかった 22 冊の作品はサンプルから除外した。残り 42 冊の内、TC をもつ 33 冊で分析対象のコーパスを構成した。その結果、文学ジャンルや文学的地位による影響を多少受けつつも、文学の場の全領域（大衆文学から純文学まで）にわたり TC が頻繁に現れていることが分かった。

第六章は、日本の TC がどれほど固定的な慣例に従っているかを明らかにするため、TC の外面的特徴（文章量、題目、配置、著者名、日付など）を確認する。結果として、題目と配置には一定の慣例が見受けられる一方、著者名と日付は任意であり、文章量は一定ではなく作品に応じて様々であることが分かった。

第七章は、TC の口調や文体、内容的特徴を検討する。それに基づき、TC に現れる修辭的構成とテーマ (topic) 構成を考察する。二つの定型文が確認されるが、内容分析の結果、大部分の TC が固定的なモデルを利用しないで書かれていることが分かった。また、日本のエッセーによく見られる修辭的パターン（三部構成、または五部構成）をとる TC もあった。こうしたことは、「訳者あとがき」の執筆には、厳格なルールが存在しないということを裏付けている。TC の多様さに一層深く注目するために、TC 内のテーマを考察する。結果として、各 TC は一般的に原文作品を強調していることから、TC 執筆者の役割は、起点文化に関する情報を読者に提供し、読者とその文化とのつながりを構築することにあると言えるだろう。また、日本の TC を検討する本論文は、TC が翻訳過程についての情報を提供するものとする欧米の先行研究に対し、その主張の一般性の相対化を求める。確かに、「翻訳」というテーマはサンプルの TC の半数に見られたが、文章量全体に占める割合はわずかであり、日本における TC は翻訳過程を議論するための媒体ではないと判断できるからである。

第八章では、著作としての TC を解読する土台を作るため、日本の国会図書館のデータを利用して、本論文で用いた調査サンプルの TC 執筆者の翻訳経験

とその実績を明らかにする。各翻訳者のデビューの状況、それ以後の活動を調べると、調査サンプルには大学教員と翻訳経験の少ない初心者が含まれていたものの、TC 執筆者の多くは職業的な文芸翻訳者であり、TC 執筆の経験が豊富であることが明らかになった。経験豊富な執筆者の中には TC の既存モデルに従うことなく、独自のスタイルの TC を駆使し、自身を提示する者もいた。

第九章では、各 TC の内容に基づき、自己イメージを表現しようとする傾向をもつ TC を二つのグループに分け、それぞれを分析する。まず、TC において翻訳者の行為性が最も少なく表現されている状態を把握するため、一人称の発言がない TC 群を考察する。このグループでは、TC 執筆者はほぼ一般的な観点から作品・作者を肯定的に評しており、これが行為性の最少レベルであると判断できる。もう一つの、一人称の発言がある TC グループでは、発言における読者への態度を検討する。この TC 群においては、翻訳に関する技術的な問題を簡潔に扱う際には、読者に対して弁解がましい表現、あるいは省略的な表現が使用されている。さらに、翻訳者の人生を原作や作家に結びつける TC 執筆者も見られた。またこのグループでは、自らの翻訳経験について語り、読者や社会に対する個人的な連帯感を表明し、文学の場に自己を位置づけようとする行為性が確認された。こうしたことから、日本における TC は翻訳者が他の行為者（読者、編集者、批評者など）との繋がりを築くことを可能にする場であり、それを通して翻訳者は文学の場における自身の位置を確定しようとしていることが明らかになった。

結論の第十章では、翻訳者が TC の機能を利用し、自己イメージを構築し循環させる行為性について熟考する。先行研究は TC の機能として、情報提供・解説・批評・メタテキスト・規範化などを強調してきたが、本論文は、サンプルの TC の考察に基づき、歓待・促進・イデオロギー・評価・自己提示などの機能もきわめて重要なものであることを示して、結論とする。